
雨降りの月夜に

トマト男爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨降りの月夜に

【Nコード】

N5206C

【作者名】

トマト男爵

【あらすじ】

月がよく見える雨の夜には何かが見える。それが『こつち側』ではない『モノ』であつても…

青紫の月夜に

雨が降ってるのに、お月さんがよく見える夜は、出会う人に気をつけるんだよ。『こつち側』にいない人も見えてしまうからねよく、おばあちゃんが言ってたっけ…

でも、生まれてから十九年の間、一度もそんな夜はこなかった。だから、そんな言葉もすっかり忘れてたんだ
もう7月なのに、朝から降り続けている雨のせいでなんか肌寒かった。

夜空を見上げたら、青紫の月が綺麗で、顔が濡れるのも構わずに月を見続けていたんだ…

終電間近の駅前。電車をあきらめた人たちはタクシー乗り場に並んでる。僕みたいに歩いて帰れる人たちは、皆足早に去っていく。

僕は何となく帰る気にもなれなくて、月を見ていたんだ…

「風邪、ひいちゃうよ?」

澄んだ、というよりも、透明感のある声。雨の降る音に混じらないその声が僕を現実に取り戻した。

「えっ? ああ、月が綺麗だったから、つい…」

何故か、自然に答える僕。知らない人、だよな…?

彼女は、そのまま僕の横に立って、空を見上げてる。僕よりも少し年上かな? かなりの美人。っていうか、すごく、『キレイ』なひと…そう、『綺麗』じゃなくて、『キレイ』。

雑誌やテレビに出てるような『観せる』顔じゃなくて、『魅せる』顔。僕は、生まれて初めて『一目惚れ』という言葉の意味を理解した。

「キレイだね…」

言ってしまったから、自分の顔が真っ赤になっていくのが分かる。

『ホントに綺麗だね、あんな色の月、初めて見た。』

どうやら、僕の言葉を勘違いしてくれたらしい。それから少し、いや、かなりなのかな? 僕たちは月を見ていたんだ。

「マキ。」

「えっ？」

「私の名前。マキっていうの。キミは？」

唐突な自己紹介。僕は少し困惑しながら

「タクミっていいいます。」

マキが、小さく笑った。

「何でいきなり敬語になるかなあ？」

だって、僕よりも年上じゃん…

マキには、僕の心の中のツツコミが分かったらしく、

「多分、正解。私は23歳。タクミはまだ八夕子前だよね？」

うっ、鋭い…でも、悪い気はしないな。あ、その笑顔ヤバイよ？こ

れってマジ恋寸前かも…なんて、考えこんでしまう僕。

「うわわっ!？」

いきなり、マキの顔が目の前に迫っていた。

「タ〜ク〜ミくん？顔が真っ赤だぞ〜？」

甘い息がかかる距離で、いたずらっぽい笑顔。こんなの、反則だよ

…これで恋に落ちなかったら、ホモ確定だって…

あれ？でも…なんか懐かしい感じがするな？

うーん、思い出せないや…はっ！今はそれどころじゃないよね…

なんかモヤモヤしたまま、僕は月を見てた。だんだん色が濃くなっ

ていく月。吸い込まれそうな青紫

唐突に、マキが口をひらあた。

「ねえ、歩かない？」

マキがそう言って、返事も聞かずに歩きだす。僕も慌てて後に続く。

やがて、ふたつの傘が並ぶと。

「変わったなあ、この辺りも…少し前までは街灯も無かったのに」

マキは僕に、というよりも自分に向かつて呟いた。

でもこの道、かなり前から街灯あった筈だけど…一体いつの話だろ

う…？

「ねえ、タクミ。この公園、知ってる？」

暫らく歩いて、右側に見える公園を見てマキが訊ねた。あれ？この公園、少し前に無くなってマンションになったよね？何でここにあるんだろう…？

「私、一緒によく来てたんだ…」

遠い目をして話すマキ。誰だろう…少なくとも、僕じゃない、誰か。あれ？何で胸が痛いんだろ？僕…

「ん？ひよっとして、ヤキモチかな？そんな顔しないでよ、相手は小さな男の子なんだから。」

くすくすと笑いながら、辺りを見渡すマキ。人気の無い、夜の公園。かなり弱くなつた雨音と、ふたつの足音だけが聞こえる。

僕も、この公園には思い出がある。小さな、ホントに小さな頃によく来てた。

そう、一緒に…誰と？どうしても思い出せない…

思い出しちゃいけない。そんな声が頭の中に響く。どうして？とても大切な事の筈なのに…？

あ、何か頭が痛くなってきた…どうしよう、立ってられない…頭を押さえてしゃがみこんだ僕に構わず、マキは喋り続けてる。

「すぐ近くに住んでたから、よく遊びに来たんだ…その子の手をひいて、私もまだ小さかったんだ」

顔は僕に向いてるけど、その瞳には僕を映していないマキ。

「その男の子、あ、もう男の人か…今はどうしてるの？」

何気ない僕の質問に、マキの表情が曇るのが分かった…僕、まずい事聞いちゃったのかなあ…？

「今は…眠ってる。」

それでもマキは答えてくれた。…まあ、こんな夜中なら、普通は寝てるよね。

「違うの、起きないの、ずっと…」

え？それって？いつの間にか頭痛は消えていて、僕はまた立ち上がっていた。

あれ？また頭の奥が痛くなってきた…

「あ、月が見えなくなりそうだよ…」

不意にマキが空を見上げて呟いた。何か焦ってるみたい…？

「時間、無いなあ。タクミ、思い出して？私を、そしてあなたを…」
え？思い出す…？困って、月を見上げたら、月の色が変わっていた。
真つ赤だ。血のような…目の前が真つ赤になる。あの時みたいに…
あの時…？

「ねえちゃん…」

かすれた声と共に涙が流れた。小さな頃に死んだ姉。近所の公園で
事故にあって…そう、僕をかばって、血の海の中で、それでも笑っ
て…

『タクちゃん、どこも痛くない？』

って言ってくれて…

「思い出したよ、真雪ねえちゃん…」

『まゆき』って言えなくて自分のことを『マキ』って呼んでた。公
園から帰る時にトラックにはねられそうになって、ねえちゃんが…
僕をかばって…

「ずっと居たの？この公園に、ずっと…？」

マキ…ねえちゃんは笑って頷いた。

「うん。幽霊も大人になれるんだって思わなかったよ。不思議だよ
ね？」

そうか、ねえちゃんはずっと僕を見ていたんだ。あの日から、ずっ
と…

下から顔を見上げてた時に感じた懐かしさ。ねえちゃんがよくやつ
てたな…ん？そういえば…

「“僕を”思い出すって云われてもなあ？ねえちゃん、どういう事
？」

また曇る表情。一体、僕の何を思い出せっていうのかなあ？

「さつき言つたよね？起きないって…」

僕が？起きない？ずっと？それって変だよ、だって僕此処にいるし…
そう思いながら足元を見たら、気付いちゃった。僕には影が無い。

つまりこれって……

「僕も、“こつち側”じゃないんだ……？」

「半分正解。もう少し思い出してみ……？」

えっ？確か、バイトの帰り道で、公園のあった辺りで……とばしてた車に……！？」

「そう。だけど、まだ身体は生きてるの。今ならまだ戻れる。」

そうか、ねえちゃんは僕を迎えに来て……？それとも『こつち側』に戻しに来た？どっちなんだろう？

「どっちとも言えない。タクミの気持ち次第かな？」

それって、すごく困る答えだよ……

「そう？まだやりたい事や心残りがあんなら、戻ればいいし、もういいや、と思うなら一緒に逝くよ。」

もし、戻るとしたら……？

「戻るなら、私だけ逝くから、此処で最後の、ホントのお別れになるね。」

悲しい筈なのに、笑顔で話している。僕は、悲しい笑顔というものを初めて見た……

「皆は今どうしてるかな？僕の近くに……？」

母さんや父さんはどうしてるだろう？ふと気になったんだ……

「見に行ってみる？」

その声に頷きながら、僕は空気が凍りつくような感覚を感じた。

周りの景色がぼやけて溶けていく……溶けて交ざって、白くなる……白く、白く……

双白の月夜に

目の前が白く染まる。何もかもが…

やがて、白い光の奔流は収まり、目の前には白い扉が現れた。小さな曇りガラスの窓の下に、『面会謝絶』のプレート。辺りを照らす無機質な蛍光灯。微かに、だけど確実に鼻腔の奥を刺す薬品の匂い。此処は…

「そう、病院：それも集中治療室。」

心なしかマキねえちゃんの声に、変な響きが含まれてるような気がする…これは怒り？いや、悲しみ…？

「部屋に入る前に決めて？私と逝く？それとも戻ることにする？えっ！？いきなり究極の選択になるの！？別に、もう少し後でも…

「自分を見てからでもいいんじゃない？」

「ダメなのよ。」

妙にきつぱりとした答え。一体なんで？

「身体が治る保証なんてないの。わかる？痛みくらいならまだいいけど、後遺症：障害が残るかもしれないのよ。」

まあ、そりゃそうだけど…それなら尚更、身体を見てからのほうが…「身体がヤバいから死ぬ、大丈夫だから生きる、なんて都合のいい話は無いの。結果として、一度身体に戻るけど、かなり苦しむコトになるわね…」

うーん、それが『ルール』らしいけど…

「でも、今逝くなら、身体には戻らないで、身体がその機能を止めるだけ。苦しまずに済むわね。」

そうか…って、なんか僕を『一緒に逝く』ように誘導してる？

「……………決めた。戻ることにする。苦しむかもしれないけど、まだまだやりたい事もあるし。」

僕は、答えを出した。もう少し“人生”ってやつを過ごしたい。そして、白い扉に手をかけた。

「入るよ、ねえちゃん…」

振り向いたら、ねえちゃんは居なかった。まさか、もう『逝って』しまったのかなあ？取り敢えず、僕は部屋に入ってみた。

「!？な、何してるの？」

部屋の中にはねえちゃんが既に入っていて、僕の身体に繋がれた管や機械を外そうとしていた。

「…許さない」

ねえちゃんの声は低く、怒りに満ちていた。

「ここで帰したら、全部が無駄になるの…」

えっ？許さない？それに、無駄になるって…？

なんだか、ねえちゃんの動きがおかしい。周りには誰もいないのに、身動きがとれないみたい…

「ジャマするなあああっ！私は、私は…ッ！」

『ダメだよ…マキ。タクちゃんはまだ私たちとは逝けないの。だから、タクちゃんは私が守る…』

同じ声が、でも、ずっと穏やかで優しい声がねえちゃんから聞こえた。

「誰？…もう一人誰か居るの？」

僕の質問に、声が応えてくれた。

『私は“まゆき”。あなたのおねえちゃん。』

えっ!？だって、お姉ちゃんなら此処に…

『そうね。でも、今タクちゃんの前に居るのはマキでしょう?』

そっすいえば…そっすだ。じゃあ、マキはお姉ちゃんじゃ無いってコト!？

『マキもまゆきもタクちゃんの姉。同じ人物。でも、違うの…』

何かよく分かんないけど…どういうこと？

雨上がりの月夜に

『そう、私、まゆきとマキは同じ人物の別人格…』

まゆきの声は淡々としていたけど、暖かさを感じる。一方で、マキは…

「あたしはタクミと逝きたいだけ。タクミなら一緒に逝ってくれると思った」

何だか、マキって子供みたい？…いや、きっと純粹なんだろうな…マキは僕の身体に近づくのをおきらめたらしく、こちら側を向いている。「ごめんね、僕はまだ逝けないよ。まだやり残したコトがいっぱいあるし…」

マキは、僕の言葉を聞くとあからさまな怒りを見せて叫んだ。

「何よ、それ！？もうあんたは死んだの！私達と逝くしか、あんたに残った道はないんだから…！！」

マキの瞳に浮かぶ涙が、必死なマキの心を映す。

『まだ死んだとは言えないでしょう？何よりタクちゃんが“戻る”というなら仕方ないじゃない。』

まゆき姉ちゃんの穏やかな言葉に、マキは逆上して叫んだ。

「何よ、あんたにそんな事を言う資格無いじゃないのよ！一緒にタクミを車に突き飛ばしたの、あんたじゃない！！」

…愕然とした。じゃあ、僕はこの“二人”に…！？

『残念だけど、それは違うわね…私は、タクミを引き戻していたの。だからタクミは死んでないのよ…』

一人は殺そうとして、一人は助けようとしてくれた。だから死んでないんだ…

「裏切り者！！」

叫ぶマキの声は、悲鳴に近かった。逆上して、興奮状態にあるのか、顔を真っ赤にさせて尚も叫ぶマキ。

「あんたも言ってたじゃない！！タクミの傍に居たいって…あんた

も言つてたじゃない！？どうして…！？」

直ぐに返事はなかった。少しして、ゆつくりと諭すような口調でまゆき姉ちゃんは話した。

『…確かに言つたわね。でもそれはタクちゃんを“こつち側”に引き込むつてことじゃなくて、傍に居て見守つていてあげたい、てことなのよ…』

まゆき姉ちゃんの言葉に嘘が無いのは何となく分かった。でも、マキにはそれが伝わらない。

「ふざけないで！あたし達は、タクミを引き込むしか無かつたのよ！そうしなければ、あたし達はあの場所に縛られ続けてたんだからね…！？」

…えつ？どういふこと？それつて…

『私達は、俗にいう“地縛霊”だったの。それから逃れるにはただ一つ、誰かを引き込んで、その誰かについて逝くしかない…』

…じゃあ、そのために僕を殺そうとした？

「違うよ、あたし達は、どうせ逝くなら、タクミと逝きたかつた。

そして、もう一度姉弟として生まれてきたかつた…」

マキの言いたいコトは分かつた。でも、それつて…

『そう、かなり自分勝手な話よね？だから私はタクちゃんを帰してあげたい。助けられなかつたから…』

そうか…僕は、どうしたらいいんだろ…？どうしたらこの“二人”を…？

「どつちにしても、もう時間はあまりないよ…」

マキが力無く呟く。

『そうね…マキもそろそろ諦めがついたでしょう？…タクちゃん。

私達はもうじき消える。だから、何も気にしないで帰つて…』
えつ？消える？それつてどういふこと？

『私達はかなりの間、霊となつてたの。その間に、少しずつ私達の霊体、つまり魂は削れていく…もうじき全部無くなるつてこと』
そんな…それじゃ、二人はその後は…？

「分からない。まゆきもあたしも消えて無くなるってことは分かるけどね。」

マキの言葉に、衝撃を受けながら、僕は考えていた事を口にした。

「ねえ…二人も僕と一緒に帰って見ない？」

『えっ!?!』

「えっ!?!」

二人は同時に驚く。そりゃそうだよね…

「ずっと考えてた…二人と一緒に居られるにはどうしたらいい?つて…出た答えがこれ。三人で僕の身体に入ろうって。ダメ…なのかな?」

『タクちゃん、本気で言ってるの?』

「出来ないよ…」

二人を…二人の姉をこのまま失いたくなかった…だから…

「やってみよう?失敗したら、僕は二人と一緒に逝くことにする。」

僕は本気だった。ダメ元でも試してみたかった。

「…じゃあ、行くよ?」

数分後、僕達は僕の身体に入ろうとした。だけど、二人の返事は無い。

「マキ…?姉ちゃん…?」

二人の返事は無い。まさか、そんな…

『…なら…』

まゆき姉ちゃんの声が微かに聞こえた。

「…タイムアップ。元気でね…まだ、こっちに来ちゃダメだよ…?」

マキの声…その時に気が付いた。

「あ、雨が…」

雨が完全に止み、僅かに残る雲を月が照らして…

雨が降ってるのに、お月さんがよく見える夜は、出会う人に気をつけるんだよ…『こっち側』にいない人も見えてしまうからね

おばあちゃんの言葉、止んでしまった雨…

「間に合わなかった…」

涙が頬を濡らす。後少しだけ欲しかった時間。

次の瞬間、僕は何かに引つ張られて、強く頭を打った…そして、目の前が白くなっていた

次に目覚めたのは、集中治療室の中だった。両親が泣き笑いの顔で僕を覗きこんでいる。

「姉ちゃん…」

涙が流れた。三人で帰ってきたかった。そんな僕の耳に、信じられない声が飛び込んできた。

「お兄ちゃん！？気が付いたんだね！よかったあ」

……………マキ！？

次いで、母さんの言葉に、耳を疑った。

「マキ、まだタクミ兄さんは目が覚めたばかりなのよ…あまり騒がないで」

マキが妹！？混乱する僕に、『妹』のマキがそつと囁いた。

「あの後、あたし達は生まれ変わったの。タクミの妹にね…」

どうやら、僕の願いは叶ったらしい。少しだけ違ったカタチでもう、雨降りの月夜は来ない、そんな気がした

雨上がりの月夜に（後書き）

何か最後は強引な感じですよね…（苦笑）怖さの無いホラーを書いてみたくて…最後までお付き合い頂き、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5206c/>

雨降りの月夜に

2011年1月17日02時12分発行